

「大学体育」の意義を考える —授業実践の一見地から—

田代 浩二¹⁾

Think over a significance of “P.E. of university” :
A personal viewpoint through “Adventure” in P.E. of my own

TASHIRO Koji

Summary

I shall guess that “P.E.” have a good chance of making a “foundation” about personality or character. But, recently, our “P.E.” keep a situation that the class have premodern way, I feel it. That will have an old style, an old ideology, an inhuman manner. However, in that manner, in that sense of value is not teaching, not for student. In my “P.E.” class own, that is not much enough about physical efficacy, about getting of skills, about mental affections, about social efficacy, or else.

Accordingly, over again, I think of the principle of “P.E.”, and think of another way of the programing for my class. That is for a memorandum of my thinking own.

1. 諸言

去る2006年、社会人としての基本的なスキルとして「社会人基礎力」という視点が経済産業省から提案された¹⁾。これは端的に「大人としてのあり方」について言及していると捉えることもできよう。この社会人基礎力は、「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」とされ、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つのテーマを掲げている。

さらにこの3つのテーマは合わせて12の要素で

構成されており（表-1）、これら12の要素を雑観してみると、それぞれの能力を助長するためには、体育やスポーツに希求されるところが大きいことは想像に難くない。

こうした昨今の時流を踏まえ、大学カリキュラムにおける体育について再考を試みる。特に授業としての体育実技に関して、視点を限定、あるいは敢えて歪めた上で「体育」を再考する論点を探ること、並びに「大学体育」の重要性や可能性を再確認するための要素を探り、自身の「備忘録」としたい。

1) 東洋大学スポーツ健康科学（白山キャンパス）研究室 〒112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

Sports and Health Science Laboratory, Toyo University, 5-28-20, Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8606, JAPAN

表-1 社会人基礎力

3つの能力	12の能力要素
前に踏み出す力（アクション） ～一歩前に踏み出し、失敗しても粘り強く取り組む力～	主体性 ～物事に進んで取り組む力
	働きかけ力 ～他人に働きかけ巻き込む力
	実行力 ～目的を設定し確実に行動する力
考え抜く力（シンキング） ～疑問を持ち、考え抜く力～	課題発見力 ～現状を分析し目的や課題を明らかにする力
	計画力 ～課題の解決に向けたプロセスを明らかにし準備する力
	創造力 ～新しい価値を生み出す力
チームで働く力（チームワーク） ～多様な人々とともに、目標に向けて協力する力～	発信力 ～自分の意見をわかりやすく伝える力
	傾聴力 ～相手の意見を丁寧に聴く力
	柔軟性 ～意見の違いや立場の違いを理解する力
	状況把握力 ～自分と周囲の人々や物事との関係性を理解する力
	規律性 ～社会のルールや人との約束を守る力
	ストレスコントロール力 ～ストレスの発生源に対する力

（経済産業省ホームページ <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/kisoryoku> より）

2. 大学体育の特性

2-1 原理に寄り添う

世界には実に豊かな言葉がある。「翻訳できない世界のことば」（創元社）²⁾は、世界が時代を越えて伝えてきた豊かな言葉を見事に集めている書である¹⁾。例えば、「VACILANDO（ヴァシランド）」（スペイン語）は、「どこへ行くかよりも、どんな経験をするかということを重視した旅をする。」³⁾というニュアンスで使われるそうだ。これは、今日の学校教育の歪みを生んだとも言える「成果主義」に反し、学ぶことそのもの、つまり学びのプロセスを重視した「アドベンチャー教育」の価値観が表現されている。また遍く「あそび」は無論、それに端を発するスポーツもまた同質と考えさせられる。

J. ホイジング、R. カイヨワに端を発するところの「あそび」に原点を見出すことができる「運動・スポーツ」を、全体性として取り扱う教科が「体育」である。そして「あそび」という概念に

基づく原点回帰ということを考えるなら、体育の活動概念も外へ向かうエネルギーや価値観を潜在的に有している領域であると論を図ることができる。われわれが従事する「教育」という世界は、「未来を創造する」という価値観からは、保守的な過去の経験則に収束させるのではなく、常に革新的であり続けるエネルギーを必然としている。しかしながら、今日の体育、体育教師はじめスタッフの価値観は果たしてどうだろうか。

このように一見、昨今の体育、特に「体育実技」は、いかんせん保守的で懐古主義的な印象を否めない。換言するなら、体育教師は自分自身が学生時代に経験したことに既存情報を織り混ぜて試している連続に過ぎないのかも知れない。少し穿った見方をするなら、体育教師ほど過去に縛られている教師はいないと言えるのではないだろうか。

ところで「一般的な体育の意義」とは何だろうか。スペンサーの「三育論」に代表される考え方による「知」「徳」「体」から「身体教育」と捉

えられた時代から、現代では「身体活動を通しての教育」として捉えられている。関川によれば、体育の意義は「体位体格の向上や身体諸器官を発達させることのみを目的としてはおらず、身体活動の持っている教育的機会（可能性）を利用して全人的発達に貢献する教育、いわゆる人間形成を目的とする」⁴⁾とされ、ここ日本の体育は心身一元論に立脚していると断じて良いだろう。

関川の言う「身体活動」とは、様々な運動・スポーツに表される「あそび」が持っている特性を含む活動である。個人的には「武道」や「泳法」等はそれに含まれないという感覚が残るが、ここではその結論を待たずに論を進めたい。

その上で、こうした「あそび」がつくる拡散的、開放的な感覚が人間形成に大きく寄与することを前提とした価値観が体育の基礎に息づいていると考えてみる。前述、今日の体育が「懐古主義的」であるという点は、昨今の体育教師が、自身の体育やスポーツの部活動などの極めて狭小な経験を授業でも無意識に再現している傾向が強いのではないか、という文脈である。敢えて口語的、批判的に表現するなら、われわれ体育教師は「工夫が足りない」ということ、また専門家として革新的な意識や探究心が高くないと推し量ることもできる。

大学の体育（実技）として「運動量の確保」「運動経験の獲得」「精神的涵養」「人間関係の拡充」「社会人基礎力の向上」等々のテーマが想定・確認できるが、少し拡散させて「①自己の環境の諸状態を健康的に統制する。②活動力を充実する。③豊かな人生をもたらす。④社会生活に対する適応性を持たせる」⁵⁾とする見地もある。

これらは個人や集団（グループ）の感覚に問いかけ、また委ねられているところが大きいのではないだろうか。冒頭「社会人基礎力」も同様で、果たして「授業の主体は誰か」という問題提起、

当に学校教育の原点に立ち返る必要に迫られている。

2-2 今日の意義

大学体育の目的に対して授業の実施内容に合理性を求めるなら、やはり学生主体の授業づくりが重要課題であるという意識を持ち続けたい。拙著にある「アドベンチャーから体育を考える」⁶⁾という視点は、昨今注目を浴びている「アクティブ・ラーニング」⁷⁾にも先駆けている。それは、アドベンチャー教育を構築する価値観に「自己決定」と「グループをつくる」という考え方⁸⁾が厳然と存在していることに裏付けられる。

また「自由をつくる」という価値観²⁾も「人間形成」に重要な思考をもたらすだろう。私たち³⁾が企画・運営している教育キャンプ、いわゆる夏休みの「サマーキャンプ」などで、参加している子どもたちから「自由時間はありますか？」や「自由に〇〇してもいいですか？」など、「自由」という概念に向き合う場面に与ることが頻発する。加えるなら「トイレに行ってもいいですか」という下りが多発する。

しかし、これらのキャンプでは前述「グループをつくる」ことを思考のベースのひとつとしているので、こうしたやりとりは子ども同士、グループの問題として差し戻すことになる。少し踏み込んで表現するなら、これらのキャンプは「教育」を前提としているので、学びの主体である「子どもたちの問題を子どもたち自身から奪わない」ことが一貫されている。果たして、学生主体であるはずの大学体育ではどうだろうか。

2-3 学生主体への取り組み

既存情報や経験則からイメージされている体育の内容は、ほぼ安定していると想像できる。ひとつは授業の進行イメージである。概して、集合

(笛)～挨拶～出欠確認～授業内容(テーマ)説明～準備運動(4拍子・8カウント)～部分練習～全体練習～整理運動(4拍子・8カウント)～挨拶～解散, という状況かも知れない。

この全てを体育教師が何某かの合図を以って仕切り, さらにまた課題設定(できる・できない等)までも教師が提示し続けているとしたら, 学習主体である学生は, いつ「学びの主人公」になれるのだろうか。授業という限られた時間の使い方, 学生自身の安全や安心をつくるコスチュームやウォーミングアップなどの準備性, 学びの機会に富んだ課題の設定や自己評価に向かうベンチマークス⁴⁾などを鑑みて構築されることが強く求められる。

言うまでもなく, 身体運動を前提とすれば相応の準備が必要である。しかし他方「なぜ更衣が必要なのか」という問いかけに出会うことがあれば, 体育教師の「あたりまえ」という経験則で結ぶことを取って疑ってみる必要もあるだろう。そしてその問いに答えるとするなら, どのような理由や説得が考えられるのだろうか。大学生になるまでに体育の授業で経験したことだけで思考を止めてしまうなら, 自分自身の安全や衛生は保たれ難いだろう。

そもそも「体育着」「体操着」「体育館履き」「室内履き」とは何か。その呼称も「体育実技」という一般的な呼称も一旦「リセット」した上で, 授業に参加するメンバー, その意志として合目的に用意する意味理解を, 教師と学生・生徒が共有している前提が求められる。教材として方法, 内容に合目的なコスチュームを主体的に理解し考えた上で初めて「準備」となるのではないだろうか。

前述の小学生のキャンプ同様, 大学の授業中でも「トイレに行ってもいいですか?」と問いかけられることがある。もちろん, いわゆる「礼儀

としてのマナーという視点では理解できる。この学生について, ゲームプレイ中のチームメンバーという視点に変えて観ると, チームメンバーとの相互確認は希薄な様子が窺える。大学体育としてのミッションに照らし合わせるなら, 学生同士のやりとりこそ重要課題と捉えるべきである。

「遅刻」や「早退」なども同様に捉えることができる。授業を履修する上でのルールやマナーという視点を逸らすなら, 「すみません。遅刻しました。」という担当教師への「謝罪めいた」やりとりは全く不要で, 学生間の良好な関係づくりに寄与しうるコミュニケーションのあり方を探索する機会として捉えたい。人員掌握や成績評価につながる出欠確認などの作業は別途考えることと判断する。

2-4 安心安全をつくる

「翻訳できない世界のことば」に, 「NUNCHI(ヌンチ)」(韓国語 名詞)⁵⁾があり, これは「他人の気持ちをひそかにくみとる, こまやかな心づかい」という感覚なのだという。日本語に照らすと「空気を読む」という感覚に近いのかも知れない。少し前のことだが「空気を読むことができない」状況や当事者を総じて「KY(ケーワイ)」と表し, 流行語のひとつとなったことは記憶に新しい。しかしながら「空気を読む」ことは成熟した大人でも難しいことであり, 今日の子供たちには「NUNCHI(ヌンチ)」を育む機会に恵まれているとは言えない。

学校での授業中, 例えば体育の時間ではどうであろうか。もし教師がほぼ全てを「仕切る」, 内容について「詳細に説明する」, 目標について「押し付ける」ような時間であったなら, 子ども同士, 学生同士が対面で関わる機会が些少となり「NUNCHI(ヌンチ)」に向かう時間をつくることは大変難しい。横並びの「ドリル・ワーク」形式

がもたらす不安や不満、「やる気」の阻害という観点は潰えないだろう。

例えば、主教材のひとつと言える「バドミントン」において、ラケットでの「シャトル拾い」を個人の課題としてその技術の習得を目指す場合で考えてみる。ここでは全体で進行、全体への技術レクチャー、元より「ラケットで床のシャトルを上手に拾い上げる」ことを目標とすると想定する。体育教師が断片的に技術指導、アドバイスを挿入しつつ学生が個々に練習を続け、目標達成（できた・できるようになる）を目指す。この状況下では、個人の能力としての表現が中心となり「できる・できない」の顕在化、また技術習得が成果そのものとなり、目標達成の時差が拡大していく。学習者として（学生・生徒）、心理的に、また社会的に「強弱の立場」をつくってしまうことも想像に難くない。

他方、この例の「シャトル拾い」そのものは身体表現として大変興味深いもので、バドミントンの経験者、つまり上手に拾い上げるスキルを身につけている者であっても、その様子は感覚的で若干の差異が認められる。さらに各々がその差異や技術を言語化することが難しいことも観察できる。これらは継続的な練習、トレーニングによって個人に習得されたスキルであり、それらには経験知と暗黙知を多様に包含されていると考えられる。

このように個人の歴史に紐解き、それまでに何らかの経験に約束された経験知や暗黙知を駆使できるスキルと仮定するなら、高々「シャトル拾い」であっても自己実現に向かう身体活動の一つとして深める要素と位置付けることもできる。であるなら「横並び」で全体として狭小なフレームで展開する教材ではなく、母体である「バドミントン」から遊離した一つの主教材、メインテーマとして抽出して授業フレームを構築する視点も強

化できるのではないだろうか。それにより個々人の向かう先「ベンチマークス」が個人に手渡され、引いては評価も教師と学生の共有事項となる。そこでは学生にも教師にも安心が寄り添い、相互に学びの機会を創出できる文脈が成立する。

また別の課題として、授業を通して観られることは、概して学生は説明の着き難い「不安」に苛まれているという状況にあることも重視したい。ウェールズ語に「GLAS WEN（グラスウェン）」という言葉がある。直訳すると「青い微笑み」とのことだが⁹⁾、こうしたシニカリズム（嘲笑主義）や「引き下げの心理」に苛まれる日常を恐れ、それに出会うより避けて通ることを選び兼ねない社会的に脆弱な学生が漸増している。このことは世間、世界が「寛容」を手放しつつあることに起因していると感じて止まない。

このような危機的な状況に流される「体育」ではなく、「行きたい場所」「集いたい時間」に乗り込む「体育」を具現化したい。われわれ体育教師は、世の中から「陽だまり感」のある時間、「寛容」のある空間を演出するための取り組みが希求される時代になったと推考している。飛躍した視点かも知れないが、R. グリーンリーフの提唱する「サーバント・リーダシップ」¹⁰⁾で論じられている考え方にも一致するところがある。成果主義から派生する上下関係や強弱関係、また組織主義から発生するヒエラルキーに同期しない「体育」という環境が、学生や子どもたちに安心して豊かな学びの機会を提供できるのである。

3. 展望

冒頭の「社会人基礎力」から紐解くなら、今日の大学生に求め育む力とは「自分で決めて、自分から動き、同時に、仲間を増やしながらか、楽しく豊かな感情が触れる方に向かう意識を保つ力」と説明を加えたい（表-2）。体育教師として自己

表-2 体育がはたらきかける潜在能力

授業をつくる3つの柱	主体的な思考をつくる12の要素
先ず‘やる’と決める力 (Have FUNN ^{*1}) ～結果や否定的な考えに囚われず 行動してみる～	自己決定 ～自分で決めて、自分で自分を動かす
	体験優先 ～意思表示や動くタイミングは大事
	LIVE感 ～「ワクワク」「ドキドキ」を手放さない
未知なる‘DEAI’を求める力(Adventure) ～先入観や正解に向かわない道を選ぶ～	‘あたりまえ’を疑う ～「知っている」過去を棚上げに
	‘安全’はゼロ・ベース ～「無事故」こそ未来への道
	‘クエスト’をつくる ～「？」を手放さない
グループをつくる力 (Full Value ^{*2}) ～自分も相手もみんなも同時に大切にする力～	話す ～アタマの中にある何かをとにかく言葉にしてみる
	聞く ～仲間の「話す」は自分の「話す」を助けてくれる
	‘ふりかえり’を続ける ～what? → so what? → now what?
	‘好き’という ～嫌いでも関わりを大切にすることはできるはず
	‘自由’を育てる ～いつも自分たちは‘自由だ’と決めてある
	‘キモチ’を吐き出す ～負の感情にはグループを育てる宝物が隠れている

* 1 「Have FUNN」: Functional Understanding is Not Necessary 「理屈抜きで楽しもう」という Project Adventure Inc.の価値観から。

* 2 「Full Value」: 「人格に上下なし、ヒエラルキーをつくらないフラットな関係を前提としてチャレンジしよう」こちらも PA. Inc. から。

反省を踏まえて、こうした「人間力」が求められているからこそ、このことについて拡散と収束を繰り返しながら大学体育の本質を捕捉し続けなければならない。さらに、この能力はとても感覚的で固有性の強い性格のものとして推し量ることができる。文脈的には「LIVE感」¹⁰⁾を持った「DEAI」¹¹⁾の機会が生々しく育むと考えている。

また教師として、教育の場面で欠かすことができない学生・生徒との対話は、必ず「対面」で行われる必然を自覚するべきであると考え。教師ひとりで個々に有効な対話を持つことは不可能に近い。しかし観察と状況への働きかけは可能である。つまり、このことも「授業(クラス)」という「共同体」に委ねていく視点を忘れないことが重要な課題のひとつと言える。「グループの力をつかう」こと、元より「グループをつくる力を育てる」ことに意識を向けたい。

本文中「翻訳できない世界のことば」から引用

文を挿し入れている。「翻訳できない世界のことば」には、時間や量などを計るいくつかの言葉が記載されている。われわれの日常では、それらを「物差」や「秤」、「メーター」や「時計」等の道具を利用して極力緻密に、あるいは一般的に共通の尺度で捉え、物事を理解することが殆んどである。しかし、人の内面は「今」のすべてに同期してはいない。それは「一般」と「特殊」を同包しながら、われわれの「当たり前」というローカル・オペレーションにアンチ・テーゼを投げかけてくれる。

概して「学び」というものは、感覚・思考・反応・反射・行為・行動など、瞬間的な説明を超えた経験知や暗黙知に彩られている。特に選ぶ言葉と文脈は個人の感覚的思考に委ねられているのではないだろうか。「翻訳できない世界のことば」を評するひとつの視点として、豊かな社会に寄与するであろう「共同体的な感覚」に安土していた日

常が世界に点在していた証明と看することもできる。世代や国境を越えて楽しむことができる伝承遊びやスポーツなどの特殊性も、言語化できない、あるいは言語化しない方が豊かなことがあるだろう。

前記「翻訳できない世界のことば」にある「SAUDADE (サウダージ)」(ポルトガル語)⁷⁾は、今日ここ日本でも多様な場面で使われている外国語のひとつであろう。語彙ニュアンスとしては「心の中になんとなくずっと持ち続けている、存在しないものへの渴望や、または愛し失った人やものへの郷愁」ということである。例えば、若い頃に何かスポーツやダンスなどに夢中になった者が、年齢を重ね、様々な人生の苦難に向き合いつつ、そうしたスポーツやダンスなどに寄り添っていくようなことも少なくない実情に近いのではないだろうか。

また体育、あるいはスポーツやダンスなど身体活動、ひいては「あそび」が生み出す「シンクロニシティ」⁸⁾への期待感も高まる。未来を担う「DEAI」に彩られた「今、ここ」を感じ、変化し続ける意識が明日の体育を豊かに構築するのもかも知れない。

注記ならびに参考文献

- 1) 「翻訳できない世界のことば」(LOST IN TRANSRA-TION by Ella Frances Sanders, 2014) 著・イラスト：エラ・フランシス・サンダース、訳・前田まゆみ、2015.より。p.41.「VACILANDO ヴァシランド」(スペイン語 動詞)「どこへ行くかよりも、どんな経験をするかということを重視した旅をする」p.40.「よく練られた旅の計画は、思いがけない冒険にはあまり向いていません。どこへ行くかははっきりわからない?すばらしい!地図や計画は窓からほっぽりだして、心の向くほうへ旅しましょう。」と記されている。
- 2) 3) 4) 特定非営利活動法人(NPO)体験学習研究会(代表理事 山路歩)は、主として進学塾「日能研」の価値観を具現化するチームであり、アドベンチャー教育を視点のひとつとして体験的な学びの場、例えば日能研の塾生を対象とした教育キャンプ
- 5) 「翻訳できない世界のことば」(LOST IN TRANSRA-TION by Ella Frances Sanders, 2014) 著・イラスト：エラ・フランシス・サンダース、訳・前田まゆみ、2015.より。p.73.「NUNCHI ヌンチ」(韓国語 名詞)「他人の気持ちをひそかくみとる、こまやかな心づかい。」p.72.「だれかの表情を見て、心配なのか怒りなのか、やさしさなのか、それとも悲しみなのか、はっきり知るのはむずかしいことです。でも、時間を重ねるにつれて、そのちがいがわかるようになります。」とある。気遣い、気配り、しかし自分を見失うと「気疲れ」を感じたり、大学生にあっては気づけば「主従関係」に陥ってしまうこともある。後出「GLAS WEN」にもつながるかも知れない。
- 6) 「翻訳できない世界のことば」(LOST IN TRANSRA-TION by Ella Frances Sanders, 2014) 著・イラスト：エラ・フランシス・サンダース、訳・前田まゆみ、2015.より。P.17.「GLAS WEN グラスウェン」(ウェールズ語)。「直訳すると「青いほほえみ」。皮肉であざ笑うようなほほえみのこと。」とある。P.16.「いじわるなほほえみから逃れるのは簡単ではありません。居心地がわるくなって、臆病なひきつり笑いなど返すよりも、その場からそっと逃げ出したいくなります。」体育の授業中に、ふと学生間の様子に気を盗られることがある。伏し目がちで、機嫌が良くないのか、体調がすぐれないのか。…見えない何か、「嘲笑の空気」に怯えているのかも知れない。
- 7) 「翻訳できない世界のことば」(LOST IN TRANSRA-TION by Ella Frances Sanders, 2014) 著・イラスト：エラ・フランシス・サンダース、訳・前田まゆみ、2015.より。p.101.「SAUDADE サウダージ」(ポルトガル語 名詞)「心の中になんとなくずっと持ち続けている、存在しないものへの渴望や、または、愛し失った人やものへの郷愁。」p.100.「単に何かや誰かを惜しむというよりもっと強い感情で、美しくも切ないアートや文学のテーマにもなります。国から国へ、人から人へ、そのニュアンスが伝わっていつているようです。」この「サウダージ」という言葉は、日本でも「市民権」を得ているのではないだろうか。「サウダージ」の感覚に入ると、世界が近くなったように思える。
- 8) ジョセフ・ジャウォースキー、金井壽宏(監訳)、金井真弓(訳)、「シンクロニシティ」(Joseph Jaworski, Synchronicity~The Inner Path of Leadership)~未来を

つくるリーダーシップ (増補改訂版), 英治出版, 2013. P. 382. より。「シンクロニシティ synchronicity」の意味は「共時性」「同時発生」「意味のある偶然の一致」などである。類似的な, 同じような出来事がほぼ同期して発生することがあるが, それらには共有できる意味や起因が認められる状況を「シンクロニシティ」という。例えば, 偶然が二つ重なることはあるかも知れない。しかし三つ以上重なったとなれば, その意味や起因を考えないわけにはいかない。一方で, こうして考えを巡らせてみても明快な起因に行き着くわけではない。要するに「シンクロニシティ」とは, 言語化できる因果関係は不安定ながら, 出来事や人との「DEAI (出会い)」そのものには意味がある状況である。しかも, その意味は未来を豊かにつくるために十分なエネルギーを持っている。

引用・参考文献

- (1) 経済産業省 HP より。http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/.
- (2)(3) エラ・フランシス・サンダース (著・イラスト) ; 前田まゆみ (訳), 「翻訳できない世界のことば」(LOST IN TRANSRATION by Ella Frances Sanders, 2014), 創元社, 2015. P. 112.
- (4)(5) 関川佳人 (編著), 井上アヤ子, 田代浩二: 創価大学テキスト「体育概論」創価大学通信教育部, 2014. pp. 2-3. P. 212.
- (6)(8)(10)(11) 田代浩二, 山路歩, 「グループの力を自己学習力へ活かす(4) ~アドベンチャー指向で体育実技を考える」, 東洋大学スポーツ健康科学紀要, 2016.
- (7) フランクリン・コヴィー・ジャバン (監修), 小林昭文 (著), 「7つの習慣『アクティブラーニング』最強の学習習慣が生まれた!」, 産業能率大学出版部, 2016. P. 207.
- (9) ロバート・K・グリーンリーフ, 金井壽宏 (監訳), 金井真弓 (訳), 「サーバントリーダーシップ」(Robert K.Greenleaf, Servant Leadership~A Journey into the Nature of Legitimate Power & Greatness), 英治出版, 2008. P. 573.
- (10) 高木幹夫: 「'学び家'で行こう~学習習慣, その幻想から抜け出す」みくに出版, 2014. P. 193.
- (11) 広岡義之: 「教育の本質とは何か~先人に学ぶ '教えと学び'」ミネルヴァ書房, 2014. P. 227.
- (12) 亀山佳明, 麻生武, 矢野智司 (編): 「子どもの社会化から超社会化まで~野性の教育をめざして」新曜社, 2000. P. 296.
- (13) ヘンリー・A・ジル (著), 渡部竜也 (訳): 「変革知識人としての教師~批判的教授法の学びに向けて」春風社, 2014. P. 394.
- (14) 岸見一郎, 古賀史健: 「嫌われる勇気~自己啓発の源流 'アドラー'の教え」ダイヤモンド社, 2013. P. 294.
- (15) 高橋健夫, 岡出美則, 友添秀則, 岩田靖 (編著): 「新版 体育科教育学入門」大修館書店, 2010. P. 296.
- (16) 岡野昇, 佐藤学 (編著), 「体育における『学びの共同体』の実践と探求」, 大修館書店, 2015. P. 239.
- (17) 瀬戸邦弘, 杉山千鶴 (編), 「近代日本の身体表象-演じる身体・競う身体」叢書・文化学の越境(20), 森話社, 2013. P. 314.
- (18) 橋本美保・田中智志 (監修), 松田恵示・鈴木秀人 (編著), 「体育科教育」教科教育学シリーズ06, 一藝社, 2016. P. 204.
- (19) 岡出美則・友添秀則・松田恵示・近藤智靖 (編), 「新版 体育科教育学の現在」, 創文企画, 2015. P. 284.
- (20) 池田守男・金井壽宏, 「引く張るリーダーから支えるリーダーへ サーバントリーダーシップ入門」, かんき出版, 2007. P. 253.
- (21) トマス・ゴードン (著), 遠藤千恵 (訳), 「親業・ゴードン博士 自立心を育てるしつけ」, 小学館, 1990. P. 284.